

キャリアパス

大臣官房審議官
(国際保健医療展開担当)

山本 尚子 Naoko YAMAMOTO

昭和60年 横浜市衛生局医官(市民の健康づくり担当)
平成3年 米国ジョンズ・ホプキンス公衆衛生大学院留学
平成7年 佐世保市保健環境部長(市の保健・医療・環境行政)
平成10年 保健医療局臓器移植対策室長補佐(脳死からの臓器移植)
平成16年 外務省国際連合日本政府代表部参事官
平成21年 防衛省人事教育局衛生官(自衛隊の衛生業務)
平成23年 健康局疾病対策課長
平成26年 北海道厚生局長(道の医療監視・食品衛生)
平成28年 現職

医系技官としてのキャリアを振り返って

臨床医になろうと思い医学部に入学しましたが、幅広い経験ができると考え厚労省に入省しました。期待どおり、様々な部局や省庁での仕事、海外勤務などを通して密度の濃い経験を積むことができています。厚労省の仕事は、国内外の優れた能力や人格、高い志と夢を持った方々と出会い、人々の健康や尊厳のために社会の課題の一つでも解決すべく共に働くことができる刺激的で素晴らしい仕事です。これまで多くの人に教えられ助けられてきたことを実感しています。



平成元年 環境庁(現環境省)自動車公害課時代

入省後、初めての本省勤務は(旧)環境庁自動車公害課で、スパイクタイヤ禁止法案の策定に携わりました。当時、冬用タイヤは金属のピンがついているタイヤが主流。スパイクが道路を削った粉じんが蓄積し、雪解け時の大気汚染、呼吸器疾患の発生が課題でした。札幌や仙台の住民が環境や健康を守るため署名活動をし、その結果、スパイクタイヤ禁止法制定に結びつきました。地域に応じた健康づくり、車が全国を自由に走ることが出来る全国一律のルール、禁止すべき行為とその理由の明確化など、各省庁の理念が異なる中で、住民とともに制度を作る意義を学びました。

平成4年 エイズ結核感染症課長補佐時代

アジアで初めてのエイズ国際会議が日本で開催されることになり、その準備・運営を担当しました。当時エイズは治療薬も限られ、差別偏見も強かったのですが、世界の医療専門家、研究者やNGO、患者・感染者の団体など様々な方との協働を通じて、治療薬の開発と平等なアクセスの保障、予防教育、患者・感染者やセクシャルマイノリティの人権擁護、エイズ孤児への支援など、グローバルな視点を持って地域の課題に取り組む連帯の力を実感しました。このときに出会った世界の友人達とはその後、様々な場面で再会し助けられています。

平成12年 浦安市助役時代

自治体でも女性の登用が言われはじめ、浦安市の助役(今と言う副市長)になりました。助役は一人でしたので、市長を補佐し、保健・医療・福祉のみならず財政、人事、都市開発、環

境など幅広い行政を経験することができました。周囲の自治体が財政難で苦しむ中、浦安市はディズニーシーの開園、埋め立て地域のマンション建設ラッシュで人口構造も若く、財政も豊かな自治体でしたが、将来の高齢化に備え福祉サービスの基盤作りと行政のスリム化に取り組みました。ディズニーランドで成人式を始めたときには全国から様々なご意見をいただいたことを覚えています。

平成16年 国連日本政府代表部参事官時代

初めての海外勤務はニューヨーク国連代表部でした。わが国の安全保障理事会への常任理事国入りを目指し、政府一丸となって取り組みました。まだ達成できていませんが、国際社会が抱える様々な課題を解決するため、わが国そして自分に何が出来るか、どう貢献すべきかを考えさせられる毎日でした。2004年暮れに発生したマグニチュード9.1、22万人以上の命を奪ったスマトラ沖地震の際には、国連機関と共同で避難先の屋外での出産を余儀なくされている妊婦さんへの物資支給と人的支援を行いました。

平成23年 健康局疾病対策課長時代

難病、エイズ、ハンセン病など病や偏見に苦しむ方々に向き合う仕事でした。特に、難病は長年、研究費で治療費の一部を補助してきましたが、対象疾患が限られ予算の確保も難しく、制度疲労が限界にきていました。難病の患者さんが安心でき、国民が納得できる公平で持続可能な新たな制度に創り替えるため、毎週末、難病の患者さんやご家族、医療関係者と話し合いを続けました。社会保障制度改革の大きな流れの中で、時を得て、人の和により、今は法律に基づく新しい制度に移行しています。